聖語蔵経巻　概観と学術上の意義

杉本一樹

（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所客員研究員）

「聖語蔵経巻」は、宮内庁正倉院事務所に所蔵される古経巻群に与えられた管理上の名称である。「聖語蔵」は東大寺尊勝院の経蔵であり、ここに伝来した経巻が明治 26 年に帝室に献納され、現在に至る。尊勝院創建は 10 世紀中葉、治承の兵火で 12 世紀末に焼亡、現在の経蔵は 13 世紀中頃の再建であり、16 世紀中期の永禄の兵火では辛くも経蔵のみが難を逃れた。華厳・真言二宗兼学の中心的院家として知られた尊勝院も、これらの災禍を経て、江戸時代には保管を旨とする状況であったらしい。しかしながら、ここに集積された経巻は、中国隋唐写経、奈良時代の一切経、平安写経と、尊勝院創建すらはるかに遡る時期のものが多数にのぼり、古代寺院東大寺のありようを、実物の経典から垣間見せてくれる。

この中の奈良朝写経 2 種（天平 12 年御願経・今更一部一切経）は、完成した経巻そのものに加えて、その書写過程で産み出された記録・文書—写経所文書が伝わっており、写経事業の舞台裏を物語る。この「正倉院文書」も分量が多く、記載が豊富である。まことに希有なことで、両者を同時に視野に収め、さらに正倉院宝物として伝わる関係品を参照することで、個別具体的な写経事例の積み上げによる奈良時代仏教史への展望が開けるであろう。一方で聖語蔵経巻には、正倉院文書との関係をこえた独自の価値があることを忘れてはならない。東アジア仏教史の大きな広がりのなかで、仏教写本の系譜上に位置づけられるべき存在なのである。

今回の報告では、その中から四分律の例をあげ、正倉院文書から知られる書写の過程と、そこから現物を見直した際に知られること、また残る課題等を紹介したい。